

パーツではなくもういっときだけ人として生きてみたかったのに！

——生命にかかわる危険な暑さの夏に——

2018/8/4

中道 和也

2016年（平成28年）3月6日（日）朝日新聞に、「初めての カズオ・イシグロ」の見出しと、イギリス最高文学賞のブッカー賞選考委員長のコメント「巧みな構成そして洗練された筆遣い a cunningly structured and beautifully paced Performance」そして彼の小説の領域、ファンタジー、SF、探偵小説、不条理小説、英国の伝統、日本の舞台の小説が紹介されていました。「はじめての」の冠詞は、日本列島に住む日本人には馴染みが少ないということなのではないでしょうか。ところが、2017年 カズオ・イシグロはノーベル文学賞を受賞したのです。

何の理由もなく、何の先入観もないのになぜか、「わたしを離さないで NEVER LET ME GO」が目にとまり、そして忘れていました。2018年7月 ふと立ち寄った本屋の中古本コーナーで「わたしを離さないで」が「わたしを見逃さないで」と呼びかけてくるのです。「わたしを離さないで」著者カズオ・イシグロ 訳者土屋政雄 解説柴田元幸 早川文庫 2008年8月25日発行。

カズオ・イシグロの推理小説的構成の文脈なのか、英文が上手なのか、翻訳が上手なのか、わからないけれど、丁度、そう麺をすするが如く、とめどもなくスルスルと読みやすく、とうとう一部、二部までを読み終えました。でも疲れしました。現在の高度な遺伝子工学を基礎とした医療技術と社会システムとのかかわり方一ひょっとしたら未来でのかかわり方を暗示しているような、ちょっと異常な世界に違和感を覚えたからです。そこで、僕の好きなチョコレートケーキと友人からいただいた紅茶で一息ついてテレビを観ると、外気は37度超え、7月初めから一ヶ月も続いている生命にかかわる危険な暑さ、厳重警戒と報じています。そして暑さは加速度的に暑くなり、乾燥しきって焦げ臭い空気の暑さなのです。

三部を読み始めると、一部、二部の柔らかく、ゆったりとした描写ではなく、文面は急にテンションをあげてきました。丁度、マラソンレースでペースメーカーが役目を終えた後、タイミングを囚って37～38キロメートルぐらいからギアを上げた走り方になる、そんなことを感じながら読み続けると22章、この章は勝負をかけた走り方の文面です。あるいは、シャーロック・ホームズが最後の場面で早口で事件に隠された戦慄をおぼえる真理を解き明かす場面のような場面でもあります。

第一部 1章～9章 1～173頁 第二部 10章～17章 177～312頁
第三部 18章～23章 315～415頁。

第一部 主人公キャシー・Hのヘールシャム学舎での生活の思い出
ヘールシャムとは、親からバイオテクノロジー操作によってこの世に作りだされた子供が16歳までを過ごす施設です。そう、作りだされたのです。生まれたのではないのです。他の施設に比べ、人道的に過ごせるように設備が良く、教育もしっかりしていて、感受性の優れた子に育てる施設です。ですが、子供たちの秘密な会話や行動は常に監視されています。キャシー・Hもこのヘールシャム出身で、同じ施

設出身の臓器提出者が提出を終えた後、回復センターでの回復をお世話しています。この施設には、提供者、介護者、管理人（先生）がいます。時折、マダムが提供者が描いた優れた絵画を買いに来ます。普通に生まれた子供と同じく喜怒哀楽のある、この年齢相応の無邪気な子供たちで、将来はなににになりたいかなどのおしゃべりをし、探偵ごっこ、先生を守る秘密親衛隊などをつくり遊んでいます。

キャシーは、ジュディが歌う「ネバーレットミゴー。オーベイビー、オーベイビー」のリフレインが好きで、テープで聞き入っているとき、ふと、マダムが近くにいることに気づきました。マダムは、しゃくりあげるように泣きじゃくっています。

歌は、「赤ちゃんが欲しいのに、赤ちゃんを産めないと言われていた女性に奇跡的に赤ちゃんが生まれたのです。赤ちゃんはどこにも行かないで。」の歌詞です。キャシーは、マダムも、お母さんの赤ちゃんへの愛情に涙を流していると思っていました。

ある時、将来は、映画俳優になりたいな—とおしゃべりをしていた時のことです。ヘルシャムの規則に反して、ルーシー先生が本当のことを話すのです。

「あなた方は、映画俳優にもなれないし、スーパーで働くこともありません。無益な空想は止めなさい。あなた方は、クローン技術によって、たった1つの目的のためにこの世に作りだされた子供です。それは 重い臓器疾患の患者に、あなた方の臓器を提出するためです。あなた方に中年もおそらくありません。老人になることはありません。」と。

提供者の子供たちには、衝撃はありません。な～んだ。そんなことか。6歳、7歳の子供心がつく頃から、うすうすは知っていたよ。そんなのイヤダとごねる子供は居ません。それは、普通に親から生まれた子供が、うすうす老人になったならば死ぬだろうと感じているのと同じなのです。

第2部 コテージでの生活そして親には会いたいのです

ヘルシャムを卒業すると、提供者と介護者だけで助け合って暮らす生活が始まります。ヘルシャムからは8人、他の施設からも来ます。保護管理人もいません。お互いの部屋を行ったり来たりして、恋もします。いつまでも、ここに居られるわけではなく、臓器提出のために あるいは、介護者になるための講習会や訓練のために、コテージを出ていきます。ある時に、提供者の親（ポジティブと呼んでいます）探しに出かけます。私たちクローン人間にも親を想い、慕う気持ちがあるのです。それぞれ親がどこかに居るはずですから、会いたいのです。

第3部 医療技術の進歩と倫理観は絡み合いながら変化する

ヘルシャム出身で、お互いに愛し合っていることの証明があれば、提供の日が猶予されるという噂がありました。介護者であるキャシーと提供者であるトミーは愛し合っていました。2人は猶予する人と思われるマダムに猶予を懇願に行くのです。マダムは横に居るエミリー先生にすべてを話しなさいと言って座をはずすのです。「猶予のシステムは昔から全くありません。噂の根拠はありません。」そして、トミーは、回復もままならず。

「マダムが提供者の描いた絵を買った理由は、クローン人間にも人の心があるのです。単なる部品ではないのです。せめて、人道的な設備のあるところで人間らしい生活をさせてくださいと、世間に訴えて寄付金を集めるためであったのですよ。」

「マダムが、ネバーレットミーゴで泣いたのは、親が赤ちゃんを思う気持ちに対してではなく、今や、世間では提供者に人道的な生活を、と思う気持ちが薄らいできて、ヘルシヤムへの寄付金も途絶え閉鎖せざるを得ない現状を泣いていたのです。」

そんなことになったのには理由があったのです。ある生物学者が、遺伝子操作によって、ある能力だけが優れる人間を人工的に創れると世間にアピールしたところ、世間の人是我々が劣等生になるのは好ましくないと拒否したのです。遺伝子操作による人間改造を拒否したのです。しかし、我々の仲間が病気で苦しんでいるのを、クローン人間で治すことは拒否しなかったのです。当たり前の治療法だと。あえて、人道的な生活をさせようとする気持ちが薄らいできたのです。

一番 怖いのは、技術の発展ではなく人の気持ちの有り様なのです。

ほぼ、同時に読み終えた本を紹介します。

「合成生物学の衝撃」著者 須田桃子 文芸春秋 2018. 4. 15 発行。

現在の米国の最先端の生物学の動向のノンフィクションです。遺伝子の情報（ゲノム）を読む時代から、次の時代、コンピューター技術と分子生物学の融合により、人工ゲノムと人工生命体を創生する実験時代が始まっていて、既に、極最小のプロトタイプ的人工細胞が創生されたことが記載されています。

また、プロローグでは、小説「わたしを離さないで カズオ・イシグロ」の紹介とエピローグでは、「マダムはなぜ泣いたか？」の理由が書かれ、2つの本のテーマがリンクしていると書かれています。

それは、「ヒトの命を操る生物学の進歩した技術の利用は、生命の尊厳と生命に対する敬虔な思想を変化させつつある時代になっている。」なのです。

クローン技術は植物に利用されています。春に堤の両岸で咲き誇るソメイヨシノや蘭の花は有名です。哺乳動物では、ヒツジのドリーが有名です。

現在の医学治療の人体の臓器の外科的な治療には、

- ① 亡くなる前に臓器提出に同意した人の臓器を臓器疾患患者への移植。
- ② ブタなどに人間の臓器を作らせる技術いつかの研究。
- ③ IPS細胞シートの移植による治療手術。

の開始があります。